

＜部会研究＞

児童文化財の研究

＜部会長＞
＜部会員＞

研究第8部 森 脇 要
研究第8部 星 美智子
研究第5部 湯 川 礼 子
住 吉 玲 子
松 原 慶 二
高 城 義太郎
渡 辺 八 重
中 山 茂
小河内 芳 子
落 合 聡三郎

恩賜財団母子愛育会福祉部長

厚生省児童家庭局育成課専門官

厚生省児童家庭局育成課主査

十文字女子短期大学教授

日本図書館協会理事

児童劇作家

本部会の研究課題は、児童福祉と対応させて児童文化財をとらえ、従来、各論にすぎなかった児童文化財について総合的に研究することを目的とする。

今年度は、つぎの三部門にわけて研究をすすめた。

- 1) 1976年度児童文化財研究文献の総合化と体系的解析
- 2) 中央児童福祉審議会推薦図書目録の活用状況の調査
- 3) 児童の観劇反応に関する研究

これらの研究は、朝日生命厚生事業団の研究助成金の補助を得ておこなわれたことを記し、ここに深く感謝します。

1976年度児童文化財研究文献の総合化と体系的解析

分担研究者 中 山 茂

児童文化に関する研究論文は、大学、研究所の紀要に多く見られるが、一般の目にふれることが少ないので、これと図書、雑誌等に見られるものを併せて一覧することを考えた。しかし、児童文化といっても、非常に広い範囲に及ぶので、児童文化財が児童の生活とかかわりあう範囲と限定して試みることとした。これとでもその限界はあきらかでないが、とにかく児童文化財と児童の生活、福祉とかかわりあうところに焦点をあてたものを選び、心理学の理論や保育技術の研究という視点に立つものや、純専門領域のもの、たとえば、児童文学論、作家論、作品論というようなものは敬遠し、専門的なもので

は、児童文化の全体理解をたすけるものとしての歴史や現状概観を内容とするものにとどめた。

1976年中に刊行されたものを主として一般に絵画・音楽・うた、劇・紙芝居・お話、児童図書・児童文学、遊び、テレビの8項目に分けて紹介することにした。なお、研究紀要は児童文化に関係する学科をもつ大学短大200校に依頼し、寄贈をうけた120冊の紀要を対象とした。御好意を感謝する。

1 一般

日本の児童文化——上笹一郎著（国土社、1976）

童文化に関するエッセイ集で、Ⅰ児童音楽、Ⅱ児童出版美術、Ⅲ児童文化の周辺の3章にわかれ、Ⅳには児童文化の理論的分析や児童文化政策論などが含まれている。

「児童文化」の内容に関する研究(1)——乳児の生活構造と母子関係——松原醇子(鳥取女子短期大学紀要第4号 1975—10)——乳児期にかかわる児童文化の要素を育児行動のなかに見出そうとしている。

「児童文化」の内容に関する研究(2)——幼児の社会的発達と感情体験——松原醇子(前掲第5号, 1976—10)——幼児期にかかわる児童文化の要素を家庭における親の育児態度と結びつけ、それが近隣遊び集団に子どもがはいって行くような社会性の発達との関連を児童文化の側からとらえようとする。

2 絵 画

「赤い鳥」の童画と児童画——上笙一郎(「日本の児童文化」Ⅱ「児童出版美術」前掲)——大正期における童画の確立及び児童画の発展に対する雑誌「赤い鳥」の貢献を高く評価している。

3 音楽・うた

幼児のうたについての考察コダーイの歌曲集「小さい人間たちの歌」を中心に——熊谷新次郎(PL学園女子短期大学紀要第3号, 1976—12)——コダーイの幼児のための歌曲集を分析して、やさしさ、狭い音域、単純なリズム、聴唱法などを幼児のうたの発達に必要なだとしている。

わらべうた—音楽教育的考察——石川雅晶(広島文教女子大学幼児教育研究会「幼児教育の研究」創刊号, 1976—6)——わらべうたの意義について、コダーイシステムなどにもふれながら、多くの研究文献をあげて分析している。

幼児の自発的なうたあそびについて——杉山昭子(四天王寺女子短期大学研究紀要XVI, 1974—12)——幼稚園における自由時間に、幼児が自発的に行なったうたあそびを観察調査した結果の報告である。

日本人のわらべ唄——上笙一郎(「日本の児童文化」Ⅰ児童音楽、前掲)——わらべ唄を芸術と生活の境界線にあたる限界芸術作品であるとして、その価値を高く評価する。

にほんの絵かきうた——永田栄一著(音楽之友社, 1976)——わらべうた、うた遊びについて体系的に述べ、そのうち、絵かきうたについて、全国的に集めたものを系統的に示している。

子どもをテレビからとりもどせ——園部三郎著(音楽之

友社, 1976)——子どもに音楽を「遊び」と「たのしみ」として与え、子どもの成長に応じていくことを説いている。

4 劇、紙芝居、お話

日本児童演劇史——富田博之著(東京書籍株式会社, 1976)——日本の児童演劇史の集大成であるが、現時点における児童演劇関係団体、主要出版物などの総覧などものせてある。

日本人形劇年鑑——1976年版(日本ウエマ=国際人形劇連盟日本センター, 1976)——内外の主な人形劇団の動き、評論、人名鑑などをのせている。

幼稚園児のお話づくりについて——「紙芝居づくり」の実践のまとめとして——土屋孝子、早川勝広(広島文教女子大学幼児教育研究会「幼児教育の研究」創刊号, 1976—6)——幼稚園の5〜6歳児17名のクラスでリレー式のお話づくりの実践のなかで、紙芝居がつくられていく過程を紹介する。

子どもと紙芝居——(「子どもの文化」1976—9特集, 財団法人文民教育協会「子どもの文化研究所」)——紙芝居の意義、特質、紙芝居運動のレポート、街や保育所における実践記録などの特集。

5 児童図書、児童文学

アンデルセン童話研究(その3)——堀内康人他(東京家政大学研究紀要第15集, 1975—3)——アンデルセン童話「みにくいあひるの子」を保育所の保育にとりいれて、子どもたちがどのような経験をし、この物語を理解し、成長したかを考察している。

幼児期及び児童期における読書の傾向に関する考察——安戸泰子(淑徳短期大学淑徳年報第3号, 1976—6)——絵本、図書の与え方を、両親の意識と子どもたちの興味とを分析しながら、発達段階ごとにまとめて検討しようとしたもので、単なる読書調査ではない。

幼稚園の図書室からの報告——嶋田信枝(広島文教女子大学幼児教育研究会「幼児教育の研究」前掲)——幼稚園の図書室の貸出の状況から、数人の幼児の借出しの実例をあげて、幼児の生活と図書とのかかわりあいを考察する。

御伽草子と日本の童話(4)——明治時代——阪谷俊作(白梅学園短期大学紀要第12号, 1976—3)江戸時代の一般向出版物であった御伽草子から、巖谷小波が童話的なものを取りだしてお伽噺として普及させた経緯をのべている。

子どもと絵本を考える——(「子どもの文化」1976—6特

集、前掲)——子どもの思考・感情・認識はどう発達するのかという心理的側面からの絵本の考察のほか、日本の絵本の歴史の概説がある。

6 遊 び

子どものあそびに関する調査研究——伊藤勝志(北海道教育大学紀要第一部教育学科編第25巻第2号、1975—2)——札幌市内の幼稚園児、小学校児980名について、自家の内外におけるあそびの種類、遊具、あそび仲間、場所、時間等について質問紙調査法による調査の結果の報告である。

幼児の遊びについて——宗真美他(別府大学児童学会年刊「児童研究」No.7、1976—2)——都市と農村の幼児の遊びを男女別に調べ、また、実際に調査者が観察した結果をまとめたものである。

子供の遊びについて——和田好枝(桃山学院短期大学紀要第2号、1975—3)——幼児の生活は遊びであるという考えを根底において、フレーベルの遊戯論を紹介しながら、幼児の発達と家庭の遊びなどと関連して考察する。

7 玩 具

玩具考察——近江忠美子(三島学園女子大学・女子短期大学紀要第10巻、1974—12)——玩具の歴史を概観し、郷土玩具の意義について考察し、精巧になった玩具の意義について疑問をもつ。

子どものおもちゃを考える——(「子どもの文化」1976—

12特集、前掲)——おもちゃの戦後史ということで、生産の現状の問題点が語られ、また、よく売れるおもちゃの値段の一覧表、女の子に人気のあるおもちゃの紹介などがある。

8 テ レ ビ

幼児とテレビの影響——岩田明子他(別府大学児童研究会年刊「児童研究」前掲)——幼児向番組の現状、母子の好む番組、家庭における視聴のしかたなど、都市と農村の幼児についてアンケート調査をした。

テレビ漫画と子どもたち——(「子どもの文化」1976—5特集、前掲)——テレビ漫画の一般論、14年間の作品170本についての解説、漫画番組制作の裏面、スポンサー一覧など、現状理解の資料となる。

全体の傾向というようなまとめ方はできないが、上氏が「日本の児童文化」のなかの「児童文化」の項で、乳幼児期の子どものための児童文化を<限界文化>と表現して、児童文化を発達段階と関連してその特色を考えようとし、松原氏が『児童文化』の内容に関する研究」のなかで、親の育児行動様式の内容として乳幼児期の児童文化を考えようとする行き方には共通の要素が含まれているように思われる。こうした着想は今後の児童文化研究の上で、いろいろなところで発展していくであろう。なお、上記の各文献の内容についてのくわしい紹介は、別に刊行される、朝日生命厚生事業団の昭和51年度研究報告書に含まれている。

中児審推薦図書目録の活用状況の調査

分担研究者 小河内芳子・渡辺 八重

I 調査の目的

中央児童福祉審議会文化財部会第一部会(出版物)は、児童福祉をすすめる事業の一環として、児童向出版物—絵本・図書等の推薦を行なっている。

推薦図書審査のための委員会は、原則として毎月1回開かれ選定された図書は解説付リストとして作成され、都道府県及び政令指定都市の児童福祉主管課、児童福祉審議会、教育委員会に各一部送付されている。

この事業は、昭和26年以来継続実施されてきたが、このリストが送付先各機関で、どのように利用されているかを、全国的に調査したことはなく、正確な状況の把握は行なわれていなかった。

最近、児童の読書普及のため親子読書運動、家庭・地域文庫活動、公共図書館児童奉仕が盛んになるのに伴い、保育所・児童館その他の児童福祉施設においても図書活動が活発化する傾向をみせており、審議会の推薦図書リストの役割も重要性を増したと考えられる。

そこでリストの利用状況を把握し、その周知徹底と利用増大を計る方策をさぐるため、全国的な調査を行なうこととなった。

II 調査の方法

調査は質問紙法によることとし、次にあげるようなアンケートを送付し、回答を求めた。

1. 質問項目

A 児童福祉主管課 宛

- 1) 推薦目録を受けとっているか
 - (1) いる (2) いない (3) 不明
- 2) 保存しているか
 - (1) いる (2) いない (3) 不明
- 3) 主管課で直接利用しているか
 - (1) いる(具体例をかく) (2) いない
- 4) 市町村に配布しているか
 - (1) コピーして配布 (2) 要請があれば配布
 - (3) していない (4) 不明 (5) その他
- 5) 市町村でどのように利用しているか

- (1) 児童館に配布図書購入に利用
- (2) 福祉事務所(家庭児童相談所)に配布・利用
- (3) 保育所に配布図書購入に利用
- (4) その他 (5) 不明

6) 市町村の利用につき指導しているか

- (1) いる(指導例をかく) (2) いない

7) 目録についての意見

- (1) 所轄課の意見 (2) 市町村の意見

B 児童福祉審議会 宛

- 1) 2) 3) 間は前に同じ

4) 目録をどこかに配布しているか

- (1) いる(配布先き記入) (2) いない

5) 目録についての意見

C 教育委員会 宛

- 1) 2) 3) 間は前に同じ

4) 目録を市町村教委に配布しているか

- (1) コピーし配布 (2) 要請があれば配布
- (3) いない (4) 不明 (5) その他

5) 市町村教委ではどのように利用しているか。

- (1) 公立幼稚園で図書購入に利用
- (2) 私立幼稚園で
- (3) 小学校で (4) 家庭学級で (5) その他

6) 市町村教委に対する指導の有無

- (1) いる(指導例) (2) いない

7) 目録についての意見(送付法・内容他)

- (1) 貴委員会の意見 (2) 市町村教委の意見

2. 対象(都道府県および政令指定都市の児童福祉主管課、児童福祉審議会、教育委員会)

3. 調査日時 昭和51年11月

III 結 果

回収数	都道府県(47)	指定都市(9)	計	回収率
主管課	45	9	54	96.4%
審議会	38	8	46	82.0%
教委	23	7	30	53.6%

A 各項目についての回答

1. 主管課 回収数 54

	うけと っている	保存し ている	直接利用		市町村へ配布の有無					市町村の利用状況					指導有無		意 見	
			ある	ない	ある	要 あれば	請 なし	不明	その他	児童館	福祉 事務所	保育所	その他	不明	ある	ない	所轄課	市町村
記入数	54	54	23	26	13	18	21		10	9	8	2	6	16	3	30	18	3
(%)	(100)	(100)	(42)	(48)	(24)	(33)	(38)		(18)	(16)	(14)	(0.3)	(11)	(29)	(0.5)	(55)	(33)	(0.5)

2. 審議会 回収数 46

	うけと っている	保存有無		利用の有無		配布の有無		意見
		ある	なし	いる	いない	いる	いない	
記入数	46	43	1	14	31	16	27	8
(%)	(100)	(39)	(0.2)	(30)	(67)	(34)	(58)	(17)

3. 教育委員会 回収数 30

	受領の有無			保存の有無			直接利用		市町村教委に配布					市町村 で利用	指 導		意 見	
	いる	いない	不明	いる	いない	不明	ある	ない	ある	要 請 あれば	ない	不明	その他	不 明	ある	ない	委員会	市町村
記 入 数	11	13	6	11	3	5	7	12			10	2	2	9	1	13	10	
(%)	(36)	(43)	(20)	(36)	(10)	(16)	(23)	(40)			(33)	(0.6)	(0.6)	(30)	(0.3)	(43)	(33)	

B このアンケート中、自由記述による回答を整理しまとめてみると、次のようになる。

1. 各機関で直接利用された例

- 1) 主管課 件数 (26)
 - イ 県公報、関係団体刊行物に掲載 (3)
 - ロ 児童館等の図書贈入の際利用 (4)
 - ハ 県及関係団体の良書推薦に利用 (8)
 - ニ 関係機関、団体に配布(書店・書店組合も含む) (7)
 - ホ 関係機関の研修会で利用 (3)
 - ヘ 関係方面よりの照会に利用 (1)
- 2) 児童福祉審議会 件数 (14)
 - イ 関係機関の刊行物に掲載 (2)
 - ロ 優良図書推薦に利用 (5)
 - ハ 審議会委員に配布 (4)
 - ニ 出版、販売業界、関係団体との話しあい使用 (1)
 - ホ 各機関、施設で図書推薦に努力しているので審議会として特にしていない (1)
 - ヘ 保母・学生の研究に利用 (1)
- 3) 教育委員会 件数 (9)
 - イ 図書選定に利用 (3)
 - ロ 図書紹介に利用 (5)
 - ハ 関係機関の資料として利用 (1)

2. 市町村その他への配布と利用状況

配布先については、三者共通しているので一括してみると

- イ 児童福祉関係機関、施設、団体、青少年健全育成会議、母親クラブ
 - ロ 市町村教委、市町村立図書館
 - ハ 書店、書店組合
 - ニ 教育委員会より幼稚園、小学校、家庭学級、その他への配布は皆無
- 配布された目録の市町村における利用方法は、(1)の直接利用の例と同様で特記すべきものはない。

3. 目録についての意見

これを大別すると(1)送付方法 (2)内容 (3)印刷 (4)その他となるが、一括すると次のようになる。

- 1) 送付方法について 件数 (18)
 - イ 部数多く。(管下の各機関、施設に送付するに足りるだけほしい) (11)
 - ロ 現在、主管課に三部一括送付されているのを別々に送ってほしい (7)

この内一県は県立図書館宛を希望
- 2) 内容について 件数 (8)
 - イ 推薦図書冊数の拡大 (1)
 - ロ 通知頻度の増加 (1)
 - ハ 該当図書の書店陳列 (2)

- ニ 不良図書の規則を望む (1)
- ホ 選定を厳格に、冊数を少なく (1)
- ヘ 学校や公共図書館の推薦事業との協力 (1)
- ト 目録の縮刷又はダイジェストを (1)

3) 印刷について

印刷を鮮明に、タイプ印刷にして、用紙を上質紙に、又は薄紙に等、コピーしやすいための要求が (6) 件

- 4) その他 図書購入に利用したいが図書費が少ない、という悩みが (1) 件、及び、県独自で目録作成しているので審議会目録は利用していないというのが (1) 件あった。

IV 統 括

以上を概観すると、推薦図書目録の送付が昭和26年以来、4半世紀にわたって継続されているにもかかわらず、その利用は至って不十分と判断される。

主管課と審議会に於ては、受領と保存はされていても、直接利用、市町村への配布と利用は極めて僅かであり、教育委員会においては、受領さえ11か所にすぎない。

主管課、審議会と教育委員会の差は、目録の一括送付にも問題がある。主管課と審議会は同一庁舎にあって、教育委員会は屢々所在地を異にしていることが考慮

されなければならない。

目録は各市町村段階にまでコピーし配布され、各施設等での図書購入や優良図書紹介に利用されるのが目的であるが、そこに至らぬことの多いのは、一つには担当関係者の、推薦目録の目的に対する理解の不充分さ、二つには送付部数の少なさにある。

送付部数は各県の要求数も異なり、必要部数全てを中央が負担することが可能かどうか問題である。またコピーの労をとることが各地方で不可能なのか、これも担当者の理解度に依存するのか、労働条件がコピーの手数を許さないのか。

これら二点については、各地の関係者と中央との話し合いが必要であろう。

目録の必要性については、否定的なもの一件を除き、ほぼ肯定されているので、取扱者への理解度の浸透を、研修会等を通じて普及させることが必要ではないだろうか。

図書購入費の少なさを嘆く声もあったが、これは貴重な声である。この方面への配慮がなければ、推薦図書目録は単なる一片の紙にすぎなくなる。

推薦図書目録の普及利用が、児童福祉施設の図書費増加となり、地域の書店を刺戟して書店店頭にも推薦図書が陳列される、そのような状態になるまで努力が続けられるべきであろう。

児童の観劇反応に関する研究

分担研究者 星 美智子
湯 川 礼子

I 研究目的

子どもの健全育成のために、子どもをとりまく文化環境をととのえ、より良い文化財を与えていくことが必須であることはいうまでもない。しかし、文化財を与えるおとなの立場から推測した「良いもの」が、必ずしも子どもに適切であるとは限らない。子どもの文化受容の問題は、科学的な基礎的研究のすずめにくい領域でもあり、それだけに児童福祉や児童文化関係者からの基礎的研究の要望はつよい。今回、われわれは、この基礎的研究のひとつとして児童劇をとりあげた。

本研究では、観劇における児童の臨場反応を徹底的に分析し、児童の理解や興味をさぐり、さらに、心的活動としての表現と観賞の課題を追究することを目的とする。

II 研究方法

1. 対象

東京都の小学6年生、観察記録—男62名、女62名、計124名。感想文分析—男24名、女36名、計60名。

2. 材料

「冒険者たち—ガンバとその仲間—」子どものためのミュージカル・プレイ（日生名作劇場公演、劇団四季出演）

原作・斎藤孝夫（「冒険者たち—ガンバと15匹の仲間」1972年、アリス館牧新社刊、A5判、372頁）

脚色・山川啓介 演出・浅利慶太

作曲・いづみたく 振付・山田 卓

（二幕七場、上演時間2時間10分）

《登場人物》

ガンバ……町ネズミ（主人公）
マンブク… （ガンバの友だち）
ガクシャ…船乗りネズミ（知識人）
ヨイショ… （力自慢）
イカサマ… （何でもサイコロできめる）
バレット… （ダンスの名手）

《梗概》

【一幕】

ガンバは自分のねぐらに満足している町ネズミで、海なんて見たことも聞いたこともない。友だちのマンブクにさそわれ、船を住みかとして七つの海を冒険する船乗りネズミのパーティに出かける。そこに傷ついた島ネズミの忠太がとびこんでくる。島ネズミを助けにしようと皆立ちあがるが、相手がイタチのノロイ一族と知ると、その恐ろしさを知る船乗りネズミは一時尻込みする。結局、ガンバをリーダーとして皆でイタチたちとの戦いに島に向かうことになる。島につくと、無気味なおどしの声、てっきりイタチたちと思うが実はツブリたち。ネズミをイタチと思いこみ身構えていたのである。ツブリたちもイタチ一族に痛めつけられ復讐しようとしており、互いに協力することになる。そのあと、島で生きのびた忠太の父、姉（潮路）、七郎らと出会う。

【二幕】

岩山のがくれ家でネズミたちの作戦会議。そこへイタチが出現し、飢えているネズミたちを食べるのでさそう。それがウナだどガンバが断ると、イタチたちはなまめかしい踊りでネズミたちを幻惑する。これに対抗して島の民謡踊りを必死におどってイタチたちを追い払う。置き残された食べものや、解決をせまる七郎の発言などで仲間が乱れそうになる。仲間割れをおそれたオイボレは、かって島を逃げた身であることを明かし、罪亡ぼし

に自分からワナにかかって死んでいく。ボーボがその後を追いつき、皆で助けるが死んでしまう。ボーボの水葬をする。ツブリの応援を求めに危険をおかして使者に立つガンバ、見おくる潮路と別れを惜しむ。海上でイタチたちと決戦がはじまる。敗戦の色濃くなったとき、ツブリたちがガンバを乗せて到着、空からイタチを攻撃し、勝利をおさめる。傷ついた潮路、ガンバに抱かれて息絶える。潮路の埋葬。ネズミたち、また新しい冒険を求めて広い世界に旅立つ。フィナーレ。

《材料の選択》

本材料は、学童招待公演であり、1) 劇場の観客全員が小学6年である、2) 公演回数が多い(年に6月と9月、各30回づつの東京公演)、3) 劇は対象を小学高学年にしばって作られ演じられている。以上の条件により、これを選択した。他の児童劇は、小学低学年向きと思われるものを、3～4歳の幼児が観客であったり、おとなと一緒であったり、対象年齢がばらばらである。そして、公演日数も2～3日から数日で他の劇場に移動する。この点、日生名作劇場は恵まれた実験材料といえ

る。

3. 手続き

1) 観劇中の児童の臨場反応を記録する。予じめ台本から、30のシークエンスに割り、主なセリフを記入した記録用紙を用意する。一方、予備調査のなかで多くみられた子どもの行動を類型別に記号化する。観劇中の子どもの行動を舞台の進行やセリフと対応させながら、マークし、あるいは記述していく。観察者は、被験児から気付かれず、しかも被験児をよく観察できる位置の子どもをえらび、隣席同志の子2名を観察する。同時に劇場の観客全体の反応も記録する。

2) 終演直後、観察者は被験児2名それぞれに、用意した14の設問を中心に面接調査をおこなう。

3) 後日、劇場側に寄せられた感想文を分析して、観劇反応を考察する。

4) 出演者たちと面接し、表現する側からの意見や感想、および子どもの受け反応などを聴取する。

4. 観察者

大学で心理学専攻し、子どもの行動を、客観的に逐次

第1表 記号と各行動

拍	拍手
○	じっとみている。のりだす。緊張する
●	期待。せきばらい。身がまえ。のび上る(新しい人物。場面への期待)
♪	一緒に歌う
P	プログラムをみる
□	笑う
▣	くすっと笑う。にやっとする。しのび笑い
⊠	ひやかし笑い。ふざけ笑い
8	泣く。涙ぐむ。しゅんとなる
∪	不安がる。恐がる。おびえる
㊦	一段落してはっとする。緊張がゆるむ。のび。あくび。一段落での身動き。姿勢かえ。
M	身動き(意味のない身動き。姿勢をかえる。坐り直す)
T	無意識の手いたずら(舞台を見ながらのものだけ)髪・プログラム・指いじり。爪かみ等
V	よそみ。目をそらす(他の子を見たり、照明をみたりするのは含まない)
△	いたずら。舞台をみないでかばんをいじったりする(他の子に迷惑かけるいたずらは×印)
×	劇に関係のないおしゃべり。他の子にちょっかい・いたずら。
↑	舞台を指さす。かけ声をかける。舞台への返事。出演者に手をふる
◎	ひとりごと。セリフをまねる(ききとれるかぎり言葉を記入)舞台の動作をまねる
～	手拍子。リズムにのって身体がうごく。調子をとる
∥	他の子と顔を見合ふ。目で合図。うなずく(顔を見合わそうと一方的に他の子を見るのも含む)
≡	内容についてのおしゃべり(身体をよせあつてのおしゃべり ≡)
⋈	身体をよせあう。隣の子によりかかる。抱きつく(二人で一つのプログラムをみる ⋈P)
⊙	話しかけられて無視。「ウルサイ」とまわりを制する。「シー」など
+	大きい音に耳をふさぐ。まぶしくて眉をしかめる(舞台や音響などの強い刺激に)
☆	天井をみる。照明をみる。音響の方に注意をむける

第2表

〔第I幕〕

	1位	2位	3位
①幕をあける歌	男 ♪ 52 P 46 ~ 29		
	女 ♪ 58 P 44 ~ 19		
計	♪ 110 P 90 ~ 48		

<一場>ガンバのねぐら

②ガンバのねぐら	○ 45 V 18 ⑧ 16		
	○ 43 P 17 ⑧ 15		
	○ 88 ⑧ 31 P 30		
③マンブクとガンバの会話	○ 47 □ 29 T 25		
	○ 56 □ 32 □ T 16		
	○ 103 □ 61 T 41		
④ガンバとマンブクの歌	○ 55 P 9 MT 8		
	○ 56 □ 10 P 8		
	○ 111 P 17 □ T 13		

<二場>港の倉庫

⑤港の倉庫	○ 54 T 17 P 8		
	○ 50 P 10 □ T 7		
	○ 104 T 24 P 18		
⑥自己紹介	○ 44 T 23 □ 20		
	○ 48 P 20 T 12		
	○ 92 T 35 P 33		
⑦町ねずみと港ねずみの力だめし	○ 76 □ 24 ⑥ 22		
	○ 44 □ 20 T 17		
	○ 120 □ 44 T 31		
⑧ひきわけ、乗船への誘い	M 34 ⑦ 32 ⑥ 30		
	○ 36 P 31 ⑦ 25		
	○ 66 P 58 ⑦ 57		
⑨忠太登場	○ 77 T 38 P 30		
	○ 71 P 56 T 38		
	○ 148 P 86 T 76		
⑩ガンバの歌オイボレ	□ 92 ○ 64 P 44		
ボーボ登場	□ 86 ○ 60 P 58		
	□ 178 ○ 124 P 102		
⑪リーダー選出	□ 63 ○ 61 ⑦ T 13		
	□ 66 ○ 47 T 28		
	□ 129 ○ 108 T 41		

<三場>甲板

⑫甲板ヨイショとガンバの会話	○ 52 P 28 T 27		
	P 51 ○ 46 M 26		
	○ 98 P 79 T 51		

<四場>岩穴の前

⑬岩穴の前	□ 36 ○ 50 ⑧ 17		
	□ 56 ○ 40 T 17		
	□ 92 ○ 90 T 28		
⑭ツブリの声	○ 54 □ 20 ☆ 19		
	○ 53 □ 27 ☆ 22		
	○ 107 □ 47 ☆ 41		
⑮ツブリ姿を現わす	○ 49 ⑦ 32 M 31		
	○ 38 P 34 M 28		
	○ 87 ⑦ M 59		

⑯潮路登場

男	□ 65 ○ 48 △ 24		
女	□ 57 ○ 41 P 34		
計	□ 122 ○ 89 T 53		
⑰コーラス・おどり	○ 55 ⑦ 30 拍 28		
	○ 56 拍 47 ⑦ P 26		
	○ 111 拍 75 ⑦ 56		

〔第II幕〕

⑱II幕の幕をあける歌	♪ 40 P 20 ~ 18		
	♪ 45 P 30 ○ 17		
	♪ 85 P 50 ~ 34		

<一場>岩山の隠れ家（踊り合戦）

⑲作戦会議	○ 55 T 32 M 22		
	○ 70 T 45 P 21		
	○ 125 T 77 M 39		
⑳仲間の動揺	○ 55 T 45 M 22		
	T 56 ○ 53 P 28		
	○ 108 T 101 M 39		
㉑ノロイ登場	□ 131 ○ 61 ⑧ M 22		
	□ 122 ○ 67 T 51		
	□ 253 ○ 128 T 71		
㉒踊り合戦	□ 63 ○ 45 MT 14		
	□ 58 ○ 57 T 26		
	□ 121 ○ 102 T 40		
㉓オイボレとボーボの死	○ 112 M 57 T 51		
	○ 114 T 81 M 43		
	○ 226 T 132 M 100		
㉔潮路とガンバの会話	× 44 P 43 V 42		
	P 49 ○ 43 T 35		
	P 92 V 71 ○ 70		

<二場>海（海戦）

㉕海戦	○ 73 T 27 M 18		
	○ 80 T 33 ⑧ 23		
	○ 153 T 60 ⑧ 40		
㉖空からの攻撃	○ 51 ⑦ 15 M 11		
	○ 43 T 20 ⑦ 10		
	○ 94 T 27 ⑦ 25		
㉗潮路の死	× 33 ⑦ V 30		
	○ 45 □ H 32		
	○ 69 V 61 × 51		

<三場>丘の上（平和な島）

㉘海の子守歌	○ 30 △ × 24		
	○ 58 T 48 ⑦ 36		
	○ 88 T 61 ⑦ 56		
㉙フィナーレ	□ 70 拍 66 ○ 41		
	□ 77 拍 55 P 46		
	□ 147 拍 121 P 83		
㉚あいさつ	P 45 拍 32 ~ 25		
	P 40 拍 34 ~ 28		
	P 85 拍 66 ~ 48		

的に記録できる技術をもつもの6名、各公演につき2～3名で観察する。

5. 日時

日生名作劇場東京公演日。1976年6月公演で予備調査をおこない、1976年9月7日～30の公演日に観察。1977年1月、感想文の分析をおこなった。

III 結 果

1. 臨場反応

1) シークエンスによる反応差

まず、記録された子どもの反応を《一緒にうたうー》、《じっとみつめるー〇》など25の記号(第1表)によって、被験児ひとりひとりについて整理する。つぎに男女別にひとつひとつの反応を舞台の動きやセリフに対応させて集計する。

これを各シークエンスごとに男・女・計の頻数を求める。シークエンス①～②④でこの頻数、すなわち、反応の多い順に3位までを列挙したのが第2表である。

ここでみるように、男女の計の各シークエンスごとの第1位をみると、《じっと緊張してみている》が19のシークエンスを占める。他の1位は《笑う》7、《歌う》2《プログラムをみる》2になっており、これらも劇にのっている行動であり、初めから最後までかなり集中して観劇しているといえる。ただし、男子だけの1位をみると、《おしゃべり・いたずら》が2シークエンス、《身うごき》が1シークエンスみられる。《おしゃべり・いたずら》は、②④のシークエンスである。②には主人公ガンバと潮路の別れを惜しむ会話とデュエットの踊りがあり、④は潮路がガンバの腕の中で息絶えるところである。なお、女子のばあいは②④の1位は《プログラムをみる》行動である。男子の《身うごき》が1位の場面は、⑧のひきわけのときであり、これは、前の⑦の場面(レスリングの力だめし)に緊張していたすぐ後の場面になっている。

以上のように第1位にあらわれる行動は男の例外的場面をのぞいて集中度のたかい行動であった。つぎに多くみられる行動を2位と3位でみると、《無意識の手いたずら》が多く、《プログラムをみる》《笑う》《弛緩》などがこれにつづく。《無意識の手いたずら》は目は舞台にあって唇はじったり、プログラムをかんだりしている行動であり、《弛緩》は緊張の強い場面のあとに数多くあらわれる行動である。したがって、2～3位に多い子どもの行動でみて本公演に子どもが熱中しているといえることができる。

2) 行動類型別の検討

つぎに、子どもの行動それぞれが、どのような場面にもっとも多くみられるかを検討した(第3表)。

第3表 各行動の一番多いシーン

	シーン番号			実 数		
	男	女	計	男	女	計
拍 拍手	②③	②③	②③	66	55	121
○ 緊張	②③	②③	②③	112	114	226
◎ 期待	②③	②③	②③	22	23	40
♪ 一緒に歌う	①	①	①	52	58	110
P プログラムをみる	①	⑩	⑩	46	58	102
□ 笑う	②③	②③	②③	131	122	253
☐ しひび笑い	②③	②③	②③	18	32	47
☒ ひやかし笑い	②③	①④	②③	21	1	21
8 泣く・涙ぐむ	②③	②③	②③	22	26	48
ゝ 恐がる・不安がる	④⑤	④⑤	④⑤	16	13	29
㊤ 弛緩	②③	②③	②③	46	42	88
M 身動き	②③	②③	②③	57	43	100
T 無意識の手いたずら	②③	②③	②③	51	81	132
V よそみ	②③	②③	②③	42	31	71
△ いたずら	⑥⑧	⑩	②③	24	13	33
× おしゃべり	②③	②③	②③	44	18	60
↑ 指さす	①	②③	①	12	9	20
◎ ひとりごと	⑦	②③	⑦	22	9	27
動作セリフをまねる	⑦	②③	⑦	22	9	27
～ リズムにのる	①	②③	①②③	29	27	48
他の子と顔見合わせ	②③	④⑤	②③	8	7	11
卍 内容について話しあ	②③	②③	②③	22	32	46
入 隣の子と身体よせあ	②③	②③	②③	5	12	15
◎ 話しかけられ制する	②③	②③	②③	8	2	10
+ 大きな音に耳をふさ	⑦	②③	⑦②③	6	10	13
☆ 天井・ライト・音源をみる	②③	②③	②③	26	24	50

《拍手》開幕、閉幕にみられるが一幕の初めの33、終り75に比し、二幕の終りで121と増加している。

《緊張》のりだしたり、真剣にみつめる行動はもっとも多くみられるが、とくに際立って多いのは②の場面である。イタチの残したたべものに皆の反対をおして七郎がとびつこうとする、オイボレがとめて自分がいくという、オイボレが自分の過去(生きのびるため島を捨てた)を話し、老いた命だからと、皆にイタチの正体をよくみろといい自分からワナにかかって死んでいく。それを追ってポーボはイタチに殺されそうになり、イカサマは自分の命の次に大切なサイコロを投げつける。ポーボは気に入った島の歌をうたってもらいながら息絶える。魚に

なりたいたいといっていたボボ、皆で「魚になりなさい」と思いをこめて水葬にする。

全体のなかでもうとも緊張を持続させ、また緊張の頻度も高い場面であった。

《期待》イタチ登場の場面が一番多い。一度オオミズナギドリをイタチと思ひこんだりする伏線があるだけに、いっそう、イタチの登場に《期待する》子どもの気持がつよいといえる。次に海戦でネズミたちが苦戦している場面が多い。オオミズナギドリとガンバの到着を待ちわびる子どもたちの気持があらわれている。

《一緒にうたう》当然、歌唱指導をうける「幕を開ける歌」に多いが、一幕100に対し二幕は85と減じている。ミュージカルナンバー「行くこうよ仲間たち」は、何回がうたわれるが子どもたちも数名づつ歌っており、フィナーレには12名の子が一緒にうたっている。

《プログラムをみる》新じく登場する人物があるとプログラムをみて確認する、たとえば「忠太」と聞くとプログラムをみて目で確かめている。また、登場人物の配役をみたりもする。その他、歌の歌詞をみるためプログラムをみている。一番プログラムをみるのが多かったのは、⑩であり、ここではボボ、オイボレが名のりであり、ヨイショ、ツジン、イカサマ、ガクシヤなどそれぞれ性格を特徴づける発言が多い。プログラムをみる行為がゆぎに多いのが⑩の場である。⑩の102人に対し92人がプログラムをみている。ここではとくに新しい登場人物はなく、ガンバと潮路の会話とデュエットの場面である。いわゆるラブシーンのところであり、子どもたちが目をそらすためにプログラムをみているのがわかる。潮路の死ぬ⑩の場面でも同じようにプログラムに目をおとしているものが47みられる。

《笑う》イタチの登場する場面⑩で、もっとも笑いが多い。やっど正体をあらわした安心感もあるらしく、全体に緊張がとけ表情がやわらいでいる。つまり、ここにご笑っている子が多い。イタチたちの身体をくねらせ手まねきの動作にゲラゲラ笑っている。またノロイがバナナを実際にたべるところでも笑いがおこる。他にもこらけいなじぐさに爆笑する。

ことばのおかしさ、ユーモアを理解しても笑っている。ガンバがわなを指摘して「ウラには何かある」というとノロイが「裏には山がある」と答えるところや、作戦会議でガンバの「よく考えてくれ」にボボが「ずうろと考えてたけど、ボクはネズミより魚に生れればよかった」という場面などである。また、「むだな抵抗はやめなさい」「どこか弱点があるだろう」など流行語でどつと笑う。

歌やおどりのたのしさににこにこ笑い、リーダーがガンバにきまったり、危機にやっどガンバが到着したりするとき、満足してうなづくようににこにこしている。

ガンバと潮路のデュエットや愛のことばの場面では、てれ笑いが多くみられる。とくに男子には女子にみられないひやかし笑いがある。また、オオボレやボボの死、潮路の死の悲しい場面では、涙をこらえたり涙をごまかすためのでれ笑いも多い。劇のながれとして笑いとは無関係な場面で笑うことはこの他にもみられる。ボボの水葬で海に埋めるとき「ドボン」と海の音がするところ、「イタチだ！」といって皆が壁にはりつくところなどは、笑いの場面でないのに抹消的表面的なことに反応しているといえよう。

また、「町のネズミ大海を知らず」「あなた方は23門鳥類管鼻目のなかまと思う」などおとなの笑いをさそうところで笑いの反応がない。シジンのセリフ「行くべきか行かざるべきか」「行く、行けば、行く時、行けよ、はい、行きます」などは子どもたちの笑いの反応が多いが、ハムレットや文法のパロディとしてではなく、演者のことばと動作のおかしさを笑っている。

《泣く、涙ぐむ》オイボレ、ボボの死、潮路の死の場面にみられる。とくに、死ぬまぎわのボボとイカサマのことばのやりとりには皆シュンとしてしまう。

ボボ「……海は広いなあ、どこまでも続いている。オイボレさんは水平線の向うに行つたんだね。ぼくはやっぱりワテンシおどられてしまった。イカサマさん、ぼくのために大事なササミをなぐじちゃったね。」「あの島のうた、ぼくすっかり気に入ってしまった。だって水平線の向うに赤い蘇鉄が咲いているなんてすてきだよ。あの歌もう一度ききたいな。」「……イカサマうなづいて歌う。ボボ息絶える。イカサマ「……お前魚になりたいうて言うてたな。……馬鹿野郎、みんなに迷惑かけやがって、畜生、お前もオイボレも、最後の最後まで俺たちを笑わせやがって……魚になりな、ボボ、思いきり泳ぎな、……」ボボを水中に埋葬する。

なお、⑩⑩の潮路がイタチにやられ、ガンバの腕の中で息絶えるところでは、女子が男以上の16名涙ぐんでいるのに男子はゼロである。

《恐がる、不安がる》いよいよイタチの出現と思わせる不気味な笑い声が客席後方からひびきわたるところ、おなじ声の主たちが「死んでもらいます」のミュージックナンバーをうたうところで子どもたちは、恐がって身体をかたくしている。

《弛緩》《身動き》《無意識の手いたずら》ともに、⑩場面にもっとも多くみられる。この場面は、すぐ前の

②のイタチとの踊り合戦が一段落してホッと緊張がとける。また、オイボレやボーボの死があり、たびたび緊張する場面があり、それにもなって緊張がゆるむ回数も多い。さらに、シュンとしたり、涙ぐんだりするのでテレビかくしに身うごきも多くなっている。

《よみそ》《いたずら》《おしゃべり》退屈したり、舞台に興味がなかったりする場面を見るために、a 舞台から目をそらす、b 自分の持物などいじるいたずら、c 他の子によっかいをだすおしゃべりやいたずら——の3段階にわけてみようとした。しかし、結果は、この三つの行動ともに②にもっとも多く、つぎに③になっている。これらのシーケンスは、いずれもいわゆるラブシーンであり、「君に言いたいことがある」「君を愛している」のセリフ、ガンバと潮路のデュエットでうたい踊るミュージックナンバー「今度会ったら」の場面である。すなわち、退屈や興ののらないということとは異質のものが多かった。これらの行動は男女ともに多いが、とくに男子に多かった。

なお、《よみそ》は、この他に涙をささいジーンとくるところで、涙をこらえるように目をそらすことも多くみられた。

つぎに、舞台にひきこまれる行動として《指さす》《ひとりごと、動作やセリフをまねる》《リズムにのって身体が動く》についてみる。

《指さす》舞台の登場人物を指さす行動で、①と③、つまり、はじめと終りの全員登場の場面にもっとも多い。登場人物の多ぜいの場面で人数をかぞえる子もいる。

《ひとりごと、動作やセリフをまねる》は、男は①のレスリングのところで登場人物の動きといっしょに力をいれて足をふんばっている。女子にはそれはみられない。乾盃するところとノロイがバナナを食べるところでは男女ともゴクンとつばをのみこむものがみられる。ひとりごとでは、オイボレがとびこむと「イイゾ、オイボレ」と声をかけたり、忠太、ノロイなど、はじめての登場に、「忠太」「ノロイ」と口走るものが多い。

《リズムにのる》「幕をあける歌」「行こうよ仲間たち」の歌と、レスリングの場面の音楽にリズムをとっているものが多い。

なかまと一緒に観劇をする特徴として、《まわりの子と顔をみあわせたり》、《内容について話しあったり》《隣の子と身体をよせあったり》がみられる。互いに共感していっそう興を深める行動としてとりあげた。これらの行動がどんな場面で見られるかをみるとつぎのようになる。

《他の子と顔をみあわす、目であいずする、うなずく、など》男子はラブシーンの②、女子はツブリの不気味な声③に多く、男女の計でみると、③のボーボ、オイボレの死がもっとも多くなっている。

《劇と関連したおしゃべり》がもっとも多いのは、男子は③ボーボの死、女子は③の潮路の死の場面と男女が別かれている。

《身体をよせあう、よりかかる、抱きつく》男子は数は少ないが、④ガンバと潮路がみつめあって二人でうたうところ、女子は④潮路の埋葬にガンバが「海の子守歌」のミュージックナンバーをうたうところに多い。

以上の他にみられる行動は、他の子の話しかけに拒否する反応、照明や音響への反応であった。

《話をけられて無視する、制する》数多くみられる行動ではないが、③のオイボレやボーボの死の場面が一番多くみられる。男子に多い。

《大きな音に耳をふさぐ》レスリングや海戦の場面の音楽の音量に耳をふさぐものがみられた。

《天井の装飾をみる、照明、音源の方をみる》シーケンス③に男女ともっとも多くみられる。どの場面かという点、ガンバの腕のなかで潮路が、息たえだえにガンバと言葉をかわし「今度会ったら」のミュージックナンバーをうたうところである。男子26、女子24で、つぎに多いツブリの声の音源をさがす、男子19、女子22より上まわっている。男女ともラブシーンに目をそらすために天井をみたり、照明をみていることが明らかである。

3) 反応総数の男女差

男女差を各行動類型別にみたのが第4表である。観劇中の各行動の頻数の総計を出して全体を100とし、男子と女子の割合によって比較をした。明らかに差のあるものについてみると、男子が女子より多い行動は、《ひやかし》(男98%、女2%)、《話しかけられて無理、制止》(男82%、女18%)、《いたずら》(男71%、女29%)、《おしゃべり》(男63%、女37%)、《ひとりごと、セリフや動作をまねる》(男75%、女25%)である。女子の方が男子より多いものは、《プログラムをみる》(男40%、女60%)、《涙ぐむ》(男35%、女65%)、《音や光に耳をふさいだり眉をしかめる》(男33%、女67%)、《身体をよせあう、寄りかかる》(男23%、女77%)である。ここでみると、男子はひやかしたり、ひとりごとをいったり、いたずらしたりと動きの多い行動が目立つ。とくに対照的なのは、隣の子に話しかけられて無視したり拒否するものが男子に多く、隣の子と身体を寄せあったりするものが女子に多いことである。

第4表 行動類型別の反応総数

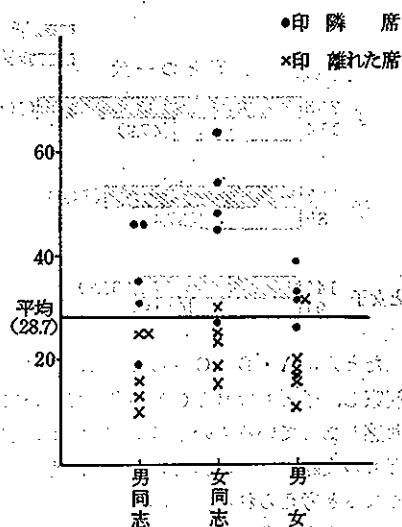
	男		女		計	
	頻	数 (%)	頻	数 (%)	頻	数 (%)
拍 拍手	153	(49.2)	158	(50.8)	311	(100)
○ 緊張	1,269	(50.2)	1,257	(49.8)	2,526	(100)
● 期待	196	(53.8)	168	(46.2)	364	(100)
♪ 一緒に歌う	117	(44.0)	149	(56.0)	266	(100)
P プログラムをみる	497	(39.6)	757	(60.4)	1,254	(100)
□ 笑う	750	(48.6)	793	(51.4)	1,543	(100)
☐ しのび笑い	179	(47.0)	202	(53.0)	381	(100)
☒ ひやかし笑い	45	(97.8)	1	(2.2)	46	(100)
S 泣く・涙ぐむ	25	(34.7)	47	(65.3)	72	(100)
ゝ 恐がる・不安がる	22	(56.4)	17	(43.6)	39	(100)
⊕ 弛緩	392	(54.5)	327	(45.5)	719	(100)
M 身動き	478	(53.2)	420	(46.8)	898	(100)
T 無意識の手いたずら	553	(42.8)	740	(57.2)	1,293	(100)
V よそみ	345	(58.5)	245	(41.5)	590	(100)
△ いたずら	316	(71.0)	129	(29.0)	445	(100)
× おしやべり	215	(62.5)	129	(37.5)	344	(100)
↑ 指さす	97	(61.0)	62	(39.0)	159	(100)
◎ ひとりごと動作セリフをまねる	122	(75.3)	40	(24.7)	162	(100)
～ リズムにのる	171	(54.1)	145	(45.9)	316	(100)
他の子と顔見合わせる	65	(50.4)	64	(49.6)	129	(100)
≡ 内容について話しあう	268	(44.0)	341	(56.0)	609	(100)
∩ 隣の子と身体よせあう	21	(23.3)	69	(76.7)	90	(100)
⊙ 話しかけられ制する	28	(82.4)	6	(17.6)	34	(100)
⊕ 大きな音に耳をふさぐ	18	(33.3)	36	(66.7)	54	(100)
☆ 天井・ライト・音源をみる	92	(51.4)	87	(48.6)	179	(100)

4) 隣席の子との一致度

観劇は他の観客と一緒にみるところに観賞の特徴がある。とくに隣席の子同志の行動は互いに影響しあうと考えられる。したがって隣り同志の子と、席を離れている子との行動の一致度を比較してみた。同一観察者の記録から、女の子同志、男の子同志、男子と女子の隣り同志の三通りを各5組とりだし、おなじく隣り同志でないものそれぞれ5組づつ、都合30組、のべ60名の行動を対象とした。まず、一組のペアの二人の行動記録をつきあわせ、同時点で同反応をしているものをチェックする。

その結果は第5表(1)～(3)となる。これを30組の平均28.7を基準としてそれぞれの合致数を図示すると第1図になる。ここでみるように、女子同志のペアが高い位置を占め、つぎに男子同志、また、男・女の隣席も平均より高いものが多い。隣席の男子、女子の1組づつ、男・女組合せの2組が平均以下である。これらは、観察対象とした隣席同志は必ずしも仲良し同志というわけで

第1図



第5表-1) 男 同 志

隣 席	一致数	離れた席	一致数
No.11 と No.12	46	No.12 と No.21	13
No.21 と No.22	46	No.22 と No.39	25
No.39 と No.40	35	No.40 と No.51	16
No.51 と No.52	19	No.52 と No.11	10
No.23 と No.24	31	No.24 と No.31	25
計	177	計	89

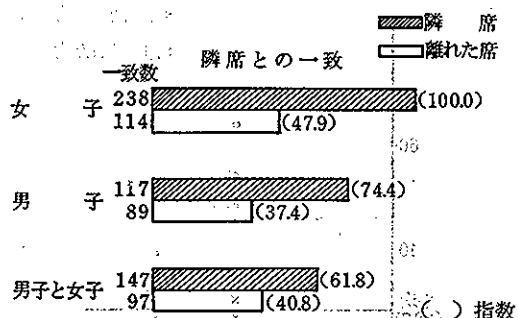
第5表-2) 女 同 志

隣 席	一致数	離れた席	一致数
No.13 と No.14	54	No.14 と No.29	24
No.35 と No.36	27	No.36 と No.45	16
No.39 と No.40	45	No.40 と No.35	30
No.29 と No.30	64	No.30 と No.39	25
No.45 と No.46	48	No.46 と No.13	19
計	238	計	114

第5表-3) 男 女

隣 席	一致数	離れた席	一致数
男 女		男 女	
No.55 と No.55	33	No.56 と No.55	11
No.56 と No.56	32	No.57 と No.56	20
No.57 と No.57	17	No.58 と No.57	16
No.58 と No.58	26	No.61 と No.58	18
No.61 と No.61	39	No.55 と No.61	32
計	147	計	97

第2図 隣席との一致



はなく、たとえばA・B・C並んでいて、われわれがA・Bを観察し、子どもはBとCが仲良しで互いに話しあったり共感しているものと考えられる。したがって、子どもの実際のペアの隣席同志なら、さらに共通反応は高くなると考えられる。

つぎに、反応合致数を5組づつ合計して、男子同志、

女子同志、男・女、の隣席と隔った席の比較をしてみた。女子同志の隣席の数値がもっとも高いので、これを100として指数で示したのが第2図である。

図でみるように、一致度は女同志、男同志、男と女の順であり、全体を平均すると、隣席79に対して離れた席42で、隣り同志は離れた席の者の倍近い一致反応がみられている。

5) 観察者間の一致度

観察者は2名の子の行動記録とともに、劇場全体の雰囲気(笑い、ざわめき、緊張など)を記録している。この記録について、観察者3名の4公演の相互の一致度をしらべた。その結果は

A : B 69.2% B : C 73.3% A : C 65.0%

であった。平均約70%の一致度であった。なお、観客全体の反応は、記録者の席の周辺の反応から記録される。したがって、観客全体の反応も、小グループごとには3割ぐらゐのちがう反応がみられるといえる。今回、ひとりの子を複数の観察者で記録する条件がととのわず、個々の子どもの観察者間の一致度は出せなかった。

2. 終演直後の面接調査

閉幕後、観察者が観察した子ども2名それぞれに1名づつ質問する。招待公演であり、学校から団体で観劇にきているので、帰り支度、劇場を出るざわめきのなかでの質問になる。集団行動を乱さないための配慮もあり、一問につきひとこと程度の回答である。しかし、観劇直後の児童の興奮と感動が質問者に伝わってくる応答が多かった。

質問項目(付2)にしたがって、結果を整理すると第6表1)~15)のようになる。各表の人数がことなるのは、さきにあげた質問時の条件により、全項目質問できず、回答をえられない項目があったためである。なお、「無答」は数の中にいれてあるが、ゆっくり待ってやれば子どもの答えが帰ってくるだろうと思われる、打切らざるをえなかったものが多く含まれている。対象人数

第6表-1) 感想

	男 N=62	女 N=57	計 N=119
面白かった・楽しかった・感動した	39 78.0%	49 74.2%	88 75.9%
ためになった	3 6.0%	4 6.1%	7 6.0%
悲しかった・かわいそう	1 2.0%	4 6.1%	5 4.3%
ドラマチック・スリルがある	1 2.0%	3 4.5%	4 3.4%
役者うまい	4 8.0%	5 7.6%	9 7.8%
装置がきれい他	2 4.0%	1 1.5%	3 2.6%

第6表-2) よかったところ

	男 N=61	女 N=61	計 N=122
最後の伸張り・フィナーレ	14 23.7	15 26.8	29 25.2
皆と力をあわせるところ	7 11.9	12 21.4	19 16.5
ガンバたちとイタチの戦い	13 22.0	8 14.3	21 18.3
イタチガンバたちの踊り	8 13.6	2 3.6	10 8.7
潮路の死・オイボレの死	6 10.2	7 12.5	13 11.3
歌のところで動き迫力がある	2 3.4	1 1.8	3 2.6
皆よかった	5 8.5	7 12.5	12 10.4
イタチの衣装他	2 3.4	0 0.0	2 1.7
無答	2 3.4	4 7.4	6 5.2

第6表-3) 劇のねらい

	男 N=55	女 N=50	計 N=115
皆が協力すれば何でも出来る	19 34.5	20 40.0	39 37.1
皆で助け合うこと・友情	9 16.4	9 18.0	18 17.1
冒険・勇気をすすめる	6 10.9	5 10.0	11 10.5
未来へ希望をもつ	0 0.0	2 4.0	2 1.9
歌・踊りでわかりやすく楽しらせる	0 0.0	3 6.0	3 2.9
イタチに勝つこと	2 3.6	1 2.0	3 2.9
わからない・無答	20 36.4	12 24.0	32 30.5

第6表-4) 誰が一番好き

	男 N=62	女 N=62	計 N=124
ガンバ	36 58.1	47 75.8	83 66.9
潮路	0 0.0	12 19.4	12 9.7
ヨイショ	12 19.4	1 1.6	13 10.5
ノロイ	5 8.1	1 1.6	6 4.8
オイボレ	1 1.6	1 1.6	2 1.6
ポーポ	2 3.2	1 1.6	3 2.4
イカサマ	1 1.6	0 0.0	1 0.8
バレット	0 0.0	1 1.6	1 0.8
ガクシヤ	0 0.0	1 1.6	1 0.8
忠太	0 0.0	1 1.6	1 0.8
ツブリ	1 1.6	0 0.0	1 0.8
ねずみ	1 1.6	0 0.0	1 0.8
皆好き	1 1.6	11 17.7	12 9.7
無答	2 3.2	0 0.0	2 1.6

第6表-5) ノロイはなぜ負けたか

	男 N=60	女 N=58	計 N=118
皆が協力したから	36 60.0	29 50.0	65 55.1
悪い者は負ける	7 11.2	5 8.6	12 10.2
正義が勝った	3 5.0	5 8.6	8 6.8
ねずみの勇気	6 10.0	9 15.5	15 12.7
ねずみのちえ	2 3.3	2 3.4	4 3.4
イタチのチームワーク悪い	1 1.7	2 3.4	3 2.5
ガンバの方が人数多い	3 5.0	1 1.7	4 3.4
歌と踊りに負けた	0 0.0	3 5.2	3 2.5
わからない・無答	7 11.2	5 8.6	12 10.2

第6表-6) オイボレはなぜ死んだか

	男 N=61	女 N=57	計 N=118
皆の犠牲になった	25 41.0	27 47.4	52 44.1
自分の罪をつくなおうと	10 16.4	3 5.3	13 11.0
イタチの悪さをしらせるため	3 4.9	10 17.5	13 11.0
イタチにやられた	9 14.8	2 3.5	11 9.3
食いもん坊だから	1 1.6	2 3.5	3 2.5
わからない・無答	12 19.7	13 22.8	25 21.2

第6表-7) ポーポはなぜ死んだか

	男 N=62	女 N=56	計 N=118
オイボレを助けようとして	24 38.7	20 35.7	44 37.3
オイボレに同情して	5 8.1	3 5.4	8 6.8
皆の迷惑になるから	3 4.8	7 12.5	10 8.5
イタチにやられた	11 17.7	5 8.9	16 13.6
魚になりたいと思った	2 3.2	1 1.8	3 2.5
もっと早く死なな	1 1.6	0 0.0	1 0.8
わからない・無答	16 25.8	13 23.2	29 24.6

第6表-8) ツブリは誰ですか

	男 N=62	女 N=57	計 N=119
鳥(おおみずなぎどりリーダー)	35 56.5	25 43.9	60 50.4
間違い(イタチ他)	2 3.2	7 12.2	9 7.6
わからない	25 40.3	25 43.9	50 42.0

第6表-9) ミュージカルについて

	男 N=62	女 N=59	計 N=121
面白い・楽しい・大好き ミュージカルの方がいい	45 72.6	66 111.3	109 90.1
普通の劇がいい	10 16.1	2 3.3	12 9.9
好きでも嫌いでもない	2 3.2	1 1.6	3 2.5
わからない・無答	10 16.1	0 0.0	10 8.3

第6表-10) 舞台装置

	男 N=61	女 N=61	計 N=122
すばらしい・すっきりし ている・みやすい	32 52.5	52 85.2	84 68.9
よく工夫してある	9 14.8	9 14.8	18 14.8
舞台転換が早くてよい	8 13.1	3 4.9	11 9.0
物足りない・本物らしく ない	10 16.3	8 13.1	18 14.8
難しい	2 3.3	3 4.9	5 4.1
無答	3 4.9	0 0.0	3 2.5

第6表-11) 衣裳

	男 N=60	女 N=62	計 N=122
お面・しっぽなくてよい	31 51.7	59 95.2	90 73.8
舞台や人物によく合っ てる	9 15.0	16 25.8	25 20.5
表情みえていい・親しみ やすい	4 6.7	8 12.9	12 9.8
他の劇と違って面白い	3 5.0	6 9.7	9 7.4
お面・しっぽあった方が よい	17 28.3	9 14.5	26 21.3

第6表-12) わからないところ

	男 N=62	女 N=55	計 N=117
わからないところはない	45 72.6	45 81.8	90 76.9
戦いの場面ごちゃごちゃ してわからない	1 1.6	1 1.8	2 1.7
オイボレ死んだところ	0 0.0	3 5.5	3 2.6
最後に潮路が歌っている	0 0.0	1 1.8	1 0.9
鳥の名前が難しい	2 3.2	0 0.0	2 1.7
話が歌になるので内容が わからない	1 1.6	0 0.0	1 0.9
何の音かわからない	1 1.6	1 1.8	2 1.7
名前がびびいてわから ない	1 1.6	0 0.0	1 0.9
ツブリどうしてでてきて やっつけたかわからない	1 1.6	0 0.0	1 0.9
イタチがなぜ悪いことす るかわからない	1 1.6	1 1.8	2 1.7
時々わからない	2 3.2	0 0.0	2 1.7
無答	7 11.3	3 5.5	10 8.5

第6表-13) 日生劇場について

	男 N=58	女 N=52	計 N=110
きれい・すばらしい・豪華	31 53.4	50 96.2	81 73.6
広い・天井が高い	14 24.1	16 30.8	30 27.3
見やすい	6 4.8	6 11.5	12 10.9
設備がいい	7 5.6	1 1.9	8 7.3
天井の装飾面白い	12 20.7	3 5.8	15 13.6
音が立体感がある	2 3.4	0 0.0	2 1.8
広くて役者が大変他	2 3.4	1 1.9	3 2.7
わからない・無答	2 3.4	2 3.8	4 3.6

第6表-14) 観劇経験

	男 N=45	女 N=45	計 N=90
あ	29 64.4	32 71.1	61 67.8
な	16 35.6	13 28.9	29 32.2

第6表-15) 今日の観劇会について

	男 N=52	女 N=47	計 N=99
楽しい・面白い・すばら しい	36 69.2	36 76.6	72 72.7
もっとあるとよい	7 13.5	12 25.5	19 19.2
皆と一緒によかった・小 学校の思い出になる	3 5.8	4 8.5	7 7.1
踊りうまい	0 0.0	2 4.2	2 2.0
心にジーンとくる	0 0.0	1 2.1	1 1.0
一番前で気持伝わる	0 0.0	1 2.1	1 1.0
悲しいこと多い・もっと 楽しく	0 0.0	2 4.2	2 2.0
ふざけたくなる他	5 9.6	1 2.1	6 6.1
わかんない・無答	8 15.4	1 2.1	9 9.1

は行動観察をした男62名、女62名、計124名である。

1) 観劇の感想はどうか。

「面白かった」「楽しかった」「感動した」「すごくよかった」などのことばで表現する子どもが大部分で、感動してことばにならない子もあった。この他、劇の構成、演技、装置に感心したり、否定的な答えのものはひとりもない。学校から引率されてきているからか「ためになった」という感想もみられる。

2) 一番よかったところはどこか。

「最後のところ」「おしまいに皆が仲良くなる」「終りに皆でおどる」などがもっとも多い。劇の結末か全員揃って歌いおどるフィナーレかははっきり区別できない

ので一緒にしたが、 $\frac{1}{2}$ を占めている。「皆と力を合せるところ」は女子に多く、「イタチとの戦い」のところは男子に多い。悲しみをさそう潮路やオイボレの死の場面を一番よかったとするものがある。一方、こっけいなイタチの踊りを一番よかったというものもある。これは男女差があり、男子は女子の4倍になっている。

3) この劇のねらいは何だと思うか。

「協力」「友情」「冒険・勇気」「希望」など、殆んどの子が劇のねらいをそれなりにつかんでいる。「歌・踊りでわかりやすく楽しくさせる」のがねらいだとミュージカルについてふれるもの、「イタチに勝つこと」と具体的にあげるものもみられた。「わからない」「無答」は、考えをうながしたり、考えている時間を待つ余裕がないためにかなり多くなっている。

4) 登場人物で一番好きなのは誰か。

男子は、ひとり1名づつあげるものが殆んどであるが、女子は「一番好き」の問いに何人かをあげており、「皆好き」という「みんな」を1と数えても男62:女77である。「皆好き」という答えは男子1人(2%)であるのに、女子は11人(18%)である。なお、男子が1名だけあげるのは、女子が「ガンバと潮路」とペアであげる子がいるのに、男子は「潮路」の名を口にするごとに抵抗があることも影響していよう。男女とも主人公のガンバをもっとも好んでいる。男子は主人公のなかまでたくましいヨイショにも人気が集まっている。ノロイが好きというものもみられる。女子はガンバのつぎには、潮路、皆好きという答えに集中している。

子どもの理解のあり方を具体的に知るために、個々の登場人物の行動を中心に質問したのが、つぎの5)~8)の項目である。

5) ノロイはなぜ負けたか。

多くの子どもたちは、ねずみたちの「皆の協力」「ねずみの勇気やちえ」がノロイたちを負かすことができたという理解をしている。単純に「ガンバたちの人数が多い」「踊り合戦に負けてしまった」というものもある。ここで「悪い者は負ける」「正義が勝つ」とはじめてらぎめているものが多いこともみのがせない。20名のものは勧善懲悪の劇づくりを期待しているか、あるいは現実もそうであると思っている。

6) オイボレはなぜ死んだか。

「皆の犠牲になった」「自分の罪をつぐなおうとして」「イタチの悪さを知らせるため(犠牲になる具体的行動)」とかなり深く劇のながれ、登場人物の行動をよみとっている答えが70%近い。一方、現象面だけで「イタチにやられながら死んだ」と答えるもの10%近い。理解できず

「わからない」という子、うまく表現できず考えこんでいる子も多い。わずか2.5%ながら「食いしん坊だから死んだ」とまったくわかっていない子もいる。

7) ボーボはなぜ死んだか。

さきのオイボレの死の答えとほぼ似た傾向である。「オイボレを助けようとして」「オイボレに同情して」「皆の迷惑になるから」と、よく理解しているものが約50%、「イタチにやられた」と具体的事実をあげるもの15%弱である。「魚になりたいと思った(ボーボの魚への美望は何度かセリフにでる)から」「もぐと動作がすばやければ死なない」という答えも3%みられる。すぐ答えがまとまらなかったり、わからないというものが25%あった。

8) ツブリは誰か。

登場人物の名前をつかんでいるかを知るため、名前で役がすぐわかってしまわない「ツブリ」を聞くことにした。「ツブリ」はおおみずなぎどりのリーダーであり、ガンバたちに協力する。約半分の子は「とり」あるいは「おおみずなぎどり」と答えているが、「イタチ」他の間違いを含めわがらないものが半分であった。登場時間も少なく、ガンバ=かんぱりや、ヨイショ=力じまんのようにな前で性格がつかめないためと考えられる。

9) ミュージカルについて

他の劇と比べてミュージカルはどうかをたずねた。観劇直後でもあり、大部分のものが「ミュージカルがよい」とこたえている。とくに、女子のばあいは、ひとりで幾通りかの答えを出しており、人数を上まわっている。一割ぐらいは普通の劇の方がよいというっており、男女にわけてみると、男子に多く、女子の5倍になっている。

10) 舞台装置はどうか。

舞台装置は構成舞台であり、具象的でない。子ども対象の舞台装置としては数少ないものといえる。たとえば、白いパネルが倉庫の壁になったり、少し形をかえて岩山になったりする。この装置を子どもたちはどううけとめているかを知るために「本ものらしい岩や木がない舞台装置だったが、どうだった?」というたずね方をした。

構成舞台のよさを「すばらしい」「すっきりしている」「みやすい」、他に「よく工夫してある」「舞台転換が早くてよい」というものが多く殆んどの子がよいというている。しかし、「本ものらしくない」「ものたりない」「むずかしい」と答えるものも19%みられる。事実、わずかだが、かなりむずかしいところもある。たとえば、ボーボと潮路の埋葬場面のちがいである。おなじように

中央に階段がある装置だが、ポーボのばあいは海に面した岩、潮路のばあいは丘の上の砂山である。したがってポーボは水葬であり潮路は土葬なのだが、子どもの中には「ポーボは男だから海へなげて、潮路は女だから海にそっとおとした」といっているものもある。また、ツブリの背ののって島をわたるところでは、舞台装置のわずかな変化で場面が変わったとされるため、「もう、ついたの?」と隣りの子にきくものもいた。全体としては構成舞台は子どもたちに好まれ、よく理解されていた。

11) 衣裳はどうか。

舞台が具象的でないように、衣裳もまた簡潔で象徴的である。シャツやジーンズの上着、ジーンズパンツである。ねずみたちはグレー、とりたちはブルー、いたちは黒と基調とする色のちがいはある。子どもたちのうけとめ方をみるため、「ねずみの衣裳はどうだった? お面もしっぽもないが」と具体的にねずみをあげて質問した。「お面やしっぽがあった方がよい」というものは、男28%、女15%で、他の多くのものが「お面やしっぽがない方がよい」「舞台や人物にみあっている」「表情がみえて親しみやすい」と衣裳について肯定的な答を出している。なかには「小さい子にはお面やしっぽがあったらわかりよい」という答えもあった。

12) わからなかったところはどこか?

わからなかったところは「ない」という答えが圧倒的で、他は「オイボレの死んだところ」(オイボレがごちそうの山に近づくと一瞬にしてネズミ取り式に戸が開き、姿がかくれてしまう)、「鳥の名がむずかしい」(ツブリが鳥らしくなくおばえにくい)など1~2名づつ分散して解らない箇所をあげている。

13) 日生劇場についての感想

第6表-13)にみるように、殆んどの子がその豪華さ、広さ、設備におどろき満足している。

14) 観劇経験があるか

観劇経験のある子ども70%、初めての子ども30%である。観劇経験のある子も、劇場では宝塚劇場他わずか3名で、他は公会堂、区民センター、学校などである。観劇経験の多いものと皆無のものとの劇の観方の比較検討をするために設問したが、実際にはみな1~2回の経験であり、それも「小さいとき一度みた」などの答えが多く、比較検討の材料をえられなかった。

15) 今日の観劇について

「学校からの今日の観劇会はどうだったか」と団体での招待観劇の感想をきいた。「すばらしかった」「楽しかった」「もっと多くあるといい」「一生の思い出になる」と感激しているものが多い。少数だがクラスの子たちと

きて「ふざけたくなる」というのもあった。友だちと一緒にきて感動をともにする喜びがある一方、まわりに影響されてテレたり、ふざけたりしてしまうことのあることがうかがえる。

3. 感想文の分析

後日、劇団側に寄せられた観劇の感想文集、男24名、女36名についてしらべた。東京30名、名古屋7名、神戸6名、大阪9名、福岡7名、いずれも小学6年である。観劇直後の感想では、「スバラシカッタ」「トッテモヨカッタ」「皆ヨカッタ」と表現されること多く、なまの感動が整理されないままのものであった。ところが感想文をみると、劇のねらい、主人公たちの生き方、感激した場面、気にいったセリフ、演ずる者への驚歎などが具体的にのべられて、子どものうけとり方がはっきりとつかめる。感想文は、適確にのびやかに自分の考えや感じたことを表現しており、そのすぐれた表現力は読むものをおどろかせる。また、プログラムにあらずしは紹介されておらず、ただ一回だけの観劇で、よくストーリーをつかみ、よく場面やセリフをおぼえていると感心させられる。これは、なかまたちと一緒に観劇したことで、後日、学級で話しあい、友だちと話しあい、劇を観たあとでも、劇の観方が深められていったからだと思う。

なお、感想文から(1)感想文からみた観劇反応の分析、(2)感想文の内容についての検討をおこなったがここでは省略する。また、出演者たちとの面接結果も紙面の都合上省略し、いずれも朝日生命厚生事業団の研究報告書にゆずる。

IV 考 察

今回、観劇中の子どもの行動を徹視的に観察して、子どもがどのような場面に笑い、泣き、とまどい、そしてひきこまれていくのか、また、それがどのような身体反応で現われるのかをつぶさにみることができた。終演直後の面接調査では子どもの感動にじかに触れることができ、感想文では子どもが劇をみて何を感じ何を学びとったかを知ることができた。これらは研究結果に十分あらわれているが、ここに結果を整理しながら考察をすすめてみたい。

1) 2時間余の公演を子どもたちは緊張し集中して観ている。これは演劇一般としていえることではなく、本公演「冒険者たち」が子どもたちをひきつけたことであろう。

劇のねらい、ストーリーをよく把握しており、かなりむずかしいと思われる内容もよみとっている。構成舞台、象徴的衣裳は難解と思われたが、子どもたちはよく

理解し、その良さを認める子が大部分であった。これは、日頃テレビに慣れ親しみ、テレビ視聴の経験がストーリーや舞台転換をよむ能力をたかめ、それが土台となっているからと考えられる。また、感想文に見る限りでは、活字ばなれといわれる子どもたちであるが、その文章の構成や表現のたし加さ、ゆたかさにおどろかされるものがあつた。

2) 演劇の約束ごとの理解、表面的抹消的な部分への反応などに、おとなとちがう幼なさもみられ、この年齢の特徴をあらわしている。

たとえば、群を表現する、いわゆるその他多ぜいの役は、ある時は鳥たちに、あるときはイタチたちになり、フィナーレで全員揃うときは数が両群にわかれ少なくなる。これにこだわって何度も指で人数をかぞえている子、また、一度死んだものがフィナーレで皆と一緒におどることに不満を感じる子などである。

構成舞台で背景がないため、水葬と土葬のちがいがわからず、男は放りなげ（水葬）、女はそっとおく（土葬）と隣りの子に話す子もいたし、黒子の存在（舞台転換のため）をわずらわしく思う子もいた。

笑う箇所をみると、この子どもたちの年齢的特徴をみることができる。すなわち、こっけいな動作に笑いこぼし、ことばのおかしさや流行語に笑う。ユーモアは理解するが、パロディになるとごく限られた子しか反応しない。劇のながれと無関係に悲しい場面でも音や動作がおかしいと笑っている。また、涙が出そうなのをテレで笑っている子も多い。

年齢的にもっとも特徴的なのは、ラブ・シーンである。一生けんめいに見ていた子がこのシーンになると、いきなりカバンの中をみたり、天井をみまわしたり、パンフレットをみたり、目をそらしてしまう。逆にふざけたり笑いこぼる子もいる。ふつうの状態でみていられず、身体が動いてしまうのである。このひとりひとりの行動で、場内全体がざわめき、騒然となる。小学低学年の子とちがいが、話がわかっているといえる一方、おとなのように劇としてつきはなしてみられない年齢といえよう。

3) 小学高学年では明らかに男女差がみられる。理解の面では差はないが、興味関心の所在、反応のしかたは大きなちがいがあつた。男子には「冒険者たち」のテーマとして《愛》ということばは出てこない。女子には《愛》がテーマとして強く印象づけられているものが多く、主人公ガンバと潮路の場面に感動している。

反応のちがいがいも明らかで、男子だけにひやかしの行動がみられる。また、感動や笑いの場面で女子は隣席の子

と身体をよせあつたりするが男子にはみられない。隣りの子が話しかけたとき無視したり拒否するのは男子だけにみられた。

4) なかまと一緒にみる学校からの観劇は、個人の観劇とちがう。子どもたちは、同年齢の子ばかりの場面で、同じ場面に笑い、同じ場面にジーンとしている。また友だち同志目でうなずきあい、話しあい、共感の喜びがある一方、まわりの影響でテレたりふざけたりもしている。後日、学校で「仲間たち」のうたをうたったり、話しあいをしており、学級での観劇は、個人の観劇よりも理解や興味がいっそう深められるといえよう。すなわち、観劇直後の面接では「よかった」「すばらしかった」としか表現できなかった子どもたちの感想文には、たった一度みただけだろうかと思うほど、劇のねらい、登場人物の性格、感動した場面やセリフが正確にのべられているのである。プログラムにあらずじがのっていないだけに、観劇後の友だち同志の話しあいの重要性を感じさせられる。

5) 出演者たちとの面接で、表現する側からの意見を聞いたが、「観客対象の年齢が揃っているので細かい芝居ができる」「子ども向きと程度をさげず、おとなの観賞にたえるように演じている」「一言一句もらさずかせるようにしている」「主人公中心でなく七人のさむらいの劇である」「はじめてラブシーンを本格的にとり入れた」「『行こうよ、仲間たち』の歌は何度もあるがその都度感動をこめて歌っている」「毎回終演後相互批判している」「練習で怪我人多く出したハードなミュージカルである」などの答えをえた。

この表現者側の意図や熱意は十分子どもたちにうけとめられたと思う。劇の内容の他にとんできた汗に感動したものは多いし、自分も大きくなって子どもたちのために演じたいと思ったものもいる。登場人物についても子どもたちは、「誰もが主役にみえた」といい、主人公ばかりでなく、ガクシャ、ヨイショ、オイボレ、ポーボ、シンジ……とそれぞれの能力や性格や行動に心うたれている。また、感想文のなかに、「…ふつう大人は子供をばかにする…その子供がみているのに」と熱演に感動し、ある子はこの劇をみて「歌と物語、そして内容からも、なんとなく大人の入り口に立ったような気がした。…」とのべている。

要 約

本研究は、児童の文化受容に関する基礎的研究のひとつとしておこなわれたものであり、観劇反応の分析を通して、児童の興味と理解、および演劇の表現と受容の特

性をさぐることを目的とする。

ミュージカル「冒険者たち」(小学6年生招待公演)をとりあげ、1) 臨場反応(男・女計126名) 2) 終演後の感想、3) 感想文、4) 出演者面接による分析検討をおこなった。

1) 児童は劇のねらいやストーリーをよく理解している。主人公はじめ登場人物に共感し、自分の生活を省ったり、将来の生き方を考えたりしている。

2) 小学6年では、男女差が明らかにみられる。理解力では差がないが、興味関心がことなり、男子が冒険や勇気、女子は愛情に感銘をうけている。反応のしかたにも差がみられ、女子は隣席の子と肩をよせ手を取りあって感動をあらわす。

3) ラブ・シーンでは、思春期初期の特性がみられ、いたずら、よそみ、身うごきの反応で場内全体がざわめく。関心をもちながら、自己の反応を抑制して、かえっ

てそれが身体反応になって現わされているといえる。

4) 観劇は他の観客と一緒にみることによって観賞の特徴がある。隣席の子同志の反応は一致数が高く、互いに共感をわかちあい、影響しあって観賞していることが明らかにされた。

5) 学級観劇では、その場の感動で終らず、後日友だちと話しあい、観劇の理解と興味をより深めることが認められた。

6) 作者、演者の真剣なとりくみ方が子どもの感動をよび、感銘を与えているといえる。

今後の課題として、舞台と客席の距離による受け反応の差をたしかめたいと思う。これは演劇の形態と劇場の広さの関係を把握する上で重要な課題といえる。また、他の演劇を材料としての観客反応調査により、今回の結果を再検討したい。

参考文献

乾孝：マスコミ時代と芸術 理論社 1960

I 4 観賞と理解

II 2 観客調査から得たもの

III A Study on Child Audience's Reactions

Hoshi Michiko

Yukawa Reiko

The present study was conducted with the intention of making a contribution to fundamental research into the culture reception of children. Its principal purpose may be described as an enquiry into the characteristics of interest and comprehension of child audiences, in other words, their "taking in" of theatrical performances, by organizing special measures to encode their observable behaviour in the hall.

The following elements are analysed: (1) the immediate reactions of the audience (in the theatre) (2) their impressions at the end of a performance (3) their compositions on the play (4) the contents of personal interviews with the players.

The play in question is a musical for primary school children known as "The Adventurers".

Results:

- (1) Children can be said to comprehend well the story of the play and the author's intent. They feel sympathy with the hero and other characters and are stimulated to reflection upon their own daily experiences; thus, are enabled to formulate principles for their future way of life.
- (2) There appears a notable sex difference in the responses at the sixth year of primary school. Although there is no difference whatsoever in their comprehensive faculty, they differ widely as to field of interest. While boys are moved by acts of adventure and bravery, girls are touched by those of love. In addition, girls differ from boys in expressing their emotions by linking hands and drawing near to one another as they watch.
- (3) When "love scenes" are performed on the stage, the children exhibit the characteristics of early puberty. Their reactions, such as playing pranks, looking aside and turning about, cause a general stir in the whole theatre. Those physical reactions can be regarded as a result of diverting themselves from attending to the actual performances of actors participating in love scenes.
- (4) A marked feature of playgoing may be that it aids the audience in enjoying the play in company with fellow spectators in the neighbouring seats. In fact, the occurrence of "taking-in" reactions is highly coincident among immediate neighbours, indicating that they are sharing with each other the same aesthetic emotions under mutual influence.
- (5) It is pointed out that the audience can deepen their comprehension of and interest in the play, if they are led afterwards to talk about it in the class rooms before the immediate impressions received in the theatre fade away.
- (6) Sincere dedication on the part of playwright, production staff and actors for the play will naturally move the children and leave a deep impression upon their minds.

In a further study, the present writers intend to attempt ascertaining the difference in "taking-in" responses due to the distance between stage and audience seats. This will be seen as a significant factor in determining the relationship between types of dramatic performances and size of theatres. A re-examination of the above results is also intended with a different child audience attending yet another play for children.